

# 自粛疲れの今、 2本の映画を観てください！

## 「痛くない死に方」と「けったいな町医者」

医学博士 長尾和宏

### 劇映画 「痛くない死に方」

10数年前から在宅医療が国策として推進されてきた。高い診療報酬をつけて政策誘導が図られてきた。その結果、都市部では沢山の在宅専門クリニックが生まれた。筆者は25年間、在宅医療に従事してきた人間として講演会や書籍やメディアで在宅医療の良さを発信してきた。しかし3年前、私の書籍のファンだと名乗るある読者からこんな手紙を頂いた。「貴方が勧める在宅医療を私の肺がんの父親にやってみたが実態は全然違っていた。在宅医に電話したが出ないしすぐに来てくれなかった。結局、父親は苦しみながら死んでいった。貴方の書いている平穏死や在宅なんて嘘だ！在宅医療なんてやるんじゃないかったー」と。

ショックだった。責任を感じ、恐る恐るその手紙を書いた娘さんにお会いすることにした。手紙と同様にすぐく責められた。その女性が依頼した在宅医はいわゆる有名在宅医であった。しかしじっくり話を聞くうちに、在宅医と患者本人と娘さんの想いがまったく噛み合っていないのではと感じた。実は、その対話を文字にしたのがベスト

セラーになった「痛い在宅医」(ブックマン社)という本である。

1年後、本書を映画化したいという声をかけて頂いた。高橋伴明監督が在宅医療や平穏死に興味を持っていると。にわかには信じられなかった。しかしその後、築地本願寺で平穏死の講演をする機会があり、伴明監督と初めてお会いした。そして監督と俳優さんとプロデューサーが尼崎にある私のクリニックに来られて一緒に在宅患者さんを訪問した。そこで映画化の話は夢ではないことを悟った。果たして伴明監督自らが脚本を書かれた。読むと平穏死を解説した拙書「痛くない死に方」も交えウイットの効いた川柳も添えられていた。

撮影は2019年8月、暑い夏に行われた。主役の痛い在宅医は柄本佑さん、ベテラン在宅医は奥田瑛士さん、患者役は宇崎竜童さん、その奥さんは大谷直子さん、私にクレームを言ってきた娘さんは坂井真紀さん、そして訪問看護師は余貴美子さんという重厚な配役であった。私は原作者としてまた医療監修としてほぼ全編に関わった。もちろん人生初の貴重な体験であった。2020年夏に公開予定であっ

たが、コロナ禍で延期となった。しかし2021年2月20日シネスイッチ銀座で封切られ、全国の映画館で順次上映される予定が決まった。在宅医療のリアル、平穏死とはなにかを知りたい人に是非観て頂きたい。生と死、尊厳死と安楽死、病院医療と在宅医療など僕のライフワークがこの映画に集約されている。

### ドキュメンタリー映画 「けったいな町医者」

「痛くない死に方」の撮影終了後に、私自身のドキュメンタリー映画の企画を頂いた。町医者の日常に密着したドキュメンタリー映画も撮り対比したいと。二つ返事でお断りした。医療は見世物ではないからだ。しかし劇映画とドキュメンタリー映画の2本同時公開という提案には魅かれる点もあり最終的に「とりあえずやってみようか」となった。

「痛くない死に方」で助監督を務めた毛利安孝氏がドキュメンタリー映画の監督として半年近く私の医療現場に密着することになった。密着初日、さっそく在宅看取り現場に遭遇した。振り

# 長尾和宏の「生」と「死」



## 長尾和宏 (ながおかずひろ)

医療法人社団裕和会理事長、  
長尾クリニック院長

1984年 東京医科大学卒業、大阪大学  
第二内科入局

1991年 医学博士（大阪大学）授与

1995年 兵庫県尼崎市で長尾クリニッ  
クを開業、現在に至る

日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス  
在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副  
理事長、全国在宅療養支援診療所連絡会  
世話人、関西国際大学客員教授

【医学博士】

日本消化器病学会専門医、日本消化器内  
視鏡学会専門医、指導医、日本在宅医学  
学会専門医、日本禁煙学会専門医、日本  
内科学会認定医、労働衛生コンサルタント

【著書】

『平穩死・10の条件』、『抗がん剤・10  
のやめどき』、『糖尿病と膵臓がん』など  
多数。『痛くない死に方』と『痛い在宅  
医』は、映画化され、2020年夏公開予  
定。近著『小説 安楽死特区』も即重版  
し、アマゾン1位。

向くと毛利氏は撮影どころか泣いていた。え？こんな調子で大丈夫？と思ったが結局、粘り強く2ヶ月間、密着してくれた。もちろん患者さんや家族の承諾を得たうえで撮影だった。果たして仮編集のDVDが送られてきた時、大きな壁にぶち当たった。患者さんやご家族の映画化の承諾が得られるかどうかという課題があった。私のなかでは、仮に承諾を得られたとしても人の生死に関わるプライベート映像を本当に映画化してもいいものか、医の倫理に反しないか、という葛藤に悩まされた。正直に告白すると、

今でもまだ葛藤している。もしかしたら公開されたら私の医者人生は終わるかも、と覚悟している。しかしせっかく承諾して頂いたご家族（多くは本人は既に旅立たれている）のご厚意に報いるためにも前向きに協力することを決めた。タイトルは

「けったいな町医者」になった。これ以上は書かないほうがいだろう。ありのままの長尾の日常と患者さんの声から医療の原点を感じ取って頂ければ幸いだ。まったくの偶然であるが、2本とも最後に登場する患者さんは同年代の肺がん患者

銀座から全国公開される。既に2本の予告編はネット上で公開されている。是非2本とも観て頂きたいがひとつだけお願いがある。両者を同じ日に観ないで頂きたい。きつと頭のなかで混乱するので日を分けて鑑賞して頂ければ幸いです。

家族の映画化の承諾が得られるかどうかという課題があった。私のなかでは、仮に承諾を得られたとしても人の生死に関わるプライベート映像を本当に映画化してもいいものか、医の倫理に反しないか、という葛藤に悩まされた。正直に告白すると、



さんである。片や劇映画の平穩死、片やドキュメンタリー映画の平穩死。両者は似た世界か、全く違う世界か。ご批判をお待ちしている。

この映画は「痛くない死に方」とほぼ同時期の2月13日（金）にシネスイッチ